

聖書:使徒の働き13章42～52節

説教:神の恵みにとどまる

はじめに

パウロとバルナバは自分たちが所属する教会から、伝道の旅に送り出され、ここではピシディアのアンティオキアと呼ばれる町に滞在しています。そこはヨーロッパとアジアの文化や物が行き交う場所でしたから、多くの外国人が住んでいて、ユダヤ人たちも沢山います。

安息日の朝、パウロはこの町にある会堂に向かい、ユダヤ人たちが信じている旧約聖書を開き、旧約聖書のみことばをとおして救い主を証していききました。

ユダヤ人たちは、神がイスラエルに救い主遣わしてくださり、イスラエルを救って下さるとずっと信じて待っています。それが彼らの信仰です。そうすると一つのことが問題となってきます。待つべき救い主はイエスと呼ばれる方なのか。それとも自分たちは別の人を待つべきなのか。言い換えれば、旧約聖書に救い主ことが書かれているけれど、それはイエス・キリストのことを指すのかどうか。そのところが大変重要になる。

エルサレムに住んでいたユダヤ人と指導者はどうしたか。イエスを救い主と認めなかった。この方には罪は何一つ見出すことができなかつたのに、かえってイエスを罪に定め、木につるし、殺してしまいます。もしそこで話が終わっていたなら、確かにユダヤ人が待つべき救い主はイエスではなかつたことになる。ところが話がそこで終わらなかつた。いや新たに始まったと言ってもいい。この方は三日目の日曜日の朝、墓からよみがえられます。もちろんパウロの作り話ではない。よみがえられたイエスを、何人もの人たちが目撃している。ということはどういうことか。ユダヤ人たちが待つべきなのはほかの人ではない。死からよみがえられたイエスこそユダヤ人たちが待ち望んでいた救い主なのだ。パウロはそのような流れで福音を語っていききました

さてこれを聞いていた人たちはどう反応したか。今日の箇所を見てまいります。

1 二つの選択肢

1) 心を探られる

42、43節。「二人が会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことを話してくれるように頼んだ。会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ

人と神を敬う改宗者たちがパウロとバルナバについて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みにとどまるように説得した。」

会堂にはユダヤ人ももちろんですが、「神を敬う改宗者たち」もおりました。ユダヤ人ではない外国人でありながら、ユダヤ教に改宗した人たちのことです。もちろんこの人たちはずっと旧約聖書を学んできていますから、パウロが取り上げた聖書の箇所はこれまで何度も聞いているはずですが、それなのに驚いた。驚く理由があります。エルサレムで十字架につけられて殺されたイエスという男、実はあの方こそ旧約聖書が指し示していた救い主である。パウロがそう語ったわけです。そんな話を聞いたことがない。本当だろうか。一度説明を聞いただけでは分からない。集会が終わってからもパウロをバルナバに疑問点を次々と質問して帰ろうとしません。でも、聞けば聞くほどこれは大事な話であることがわかってきた。自分たちだけではない。もっと大勢の人たちを誘って聞いてもらわなければならない。それで、次の安息日にもう一度話をしてくれと頼みます。

2) イエスを救い主として受け入れるのか、それとも。

会堂にいた人たちはパウロの話を聞いて、「おもしろかった」では済まなことのすぐに気がつきました。話を聞いた以上、二つの選択肢のうちのどちらかを選ばなければならないのです。一つ目の選択肢はこうです。もしパウロの話が本当ならば、イエスと呼ばれる方こそ神が遣わしてくださった救い主として受け入れなければならない。そして二つ目は、その逆です。パウロの話は作り話であって、全くの嘘偽りであり、従ってエルサレムで十字架につけて殺されたイエスという男は救い主ではない。どちらを選ぶか、あいまいな態度は許されません。必ずどちらかを選ばなければならない。

いったいどちらを選ぶべきか。戸惑っている人々に対して、パウロは神の恵みにとどまりなさいと忍耐強く説得を続けます。

2 パウロ

1) ユダヤ人たちの反対にあう

次の安息日になると、会堂にはほぼ町中の人々が主のことばを聞くために集まって来たまました。ここから大きな騒動に発展していきます。45節。

「しかし、この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロが語ることに反対し、口汚くののしった。」また50節にはこうある。「ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の主だった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出した。」

ローマ書でパウロはこう書いています。「ユダヤ人のすぐれている点は何ですか。(中略)あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のこぼを委ねられています。」(ローマ3章1, 2節) 神のこぼを委ねられていたのに、皮肉なことエルサレムに住むユダヤ人はイエスを拒み、十字架につけて殺してしまいます。アンティオキアの町でも、パウロがどんなに説得してもユダヤ人たちは強く反対し、追い出しにかかります。

2) キリスト教との出会い

こんなに熱心に語ったのに、どうしてここまでひどい扱いをされなければならないのか。がっかりしながら町を出て行ったのかと考える。ところが52節にこうある。「弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」不思議に思いませんか。神の特別な守りがあったからでしょうか。送り出した母教会の熱心な祈りがあったからだ。もちろんそれもあるでしょう。

でも、パウロはどんな人であったかを思い出してみたらどうでしょうか。パウロはかつて何をした人だったか。パウロは生粋のユダヤ教徒で律法の教えを堅く守ることに熱心なパリサイ派に属していました。若いときにわざわざ留学して当時世界でも有名な律法の先生について勉強をし、将来はパリサイ派のリーダーになることが約束されていた人です。そんな彼がキリスト教の教えと初めて出会ったのは、教会のリーダーであったステパノが逮捕され、裁判にかけられたときであったようです。ステパノが旧約聖書を開きながら、アブラハム、モーセ、預言者を取り上げながら堂々と神の救いの計画を語ってから、最後にこう言う。「あなたがたユダヤ人は、預言者が告げていた救い主を殺し、律法を守りませんでした。」パウロはそれを聞いていた。でも全くステパノの言っている事を理解しない。むしろ腹を立てて、ステパノを処刑するよう賛成票を投じた。

ところがその後、パウロはよみがえられたイエスの声を直接に聞くという体験をして、彼は自分の罪を認め、キリストンになっていく。そうしていま海外に派遣されてキリストを語る者になっている。それがパウロです。

3) ユダヤ人たちへの思い

そうするとパウロが町から追い出されたとき、彼はどう思ったか。自分たちを迫害し、反対するユダヤ人の気持ちが分からなかったのか。反対です。手に取るように分かる。なぜなら、自分もかつて同じことをしていたから。ステパノが、イエス・キリストこそユダヤ人が待ち望んでいた救い主なのだと言ったのを聞いて、怒りに燃えて彼を殺すことに賛成した。キリストはユダヤ教の敵である。彼らを徹底的に潰すことこそ、神を愛する者のすることである。そう思い込んでいた。アンティオキアのユダヤ人がしていることは、かつてパウロがしてきたこと。だから気持ちもよくわかる。

そうしますと、パウロとバルナバは、アンティオキアの町に来たとき、何を予想していたのか。救われる人々も起こされるだろう。でも、ユダヤ人々から強い反対にあうだろう。もう最初から予想している。ですからなにか突然の思いがけないことが起きて追い出されたのではない。予想どおりに口汚くののしられ、迫害され、町にいらなくなっていく。

でも、パウロがかつて自分がしてきたことを振り返れば、ユダヤ人々から迫害されても腹が立たない。彼らの気持ちもよく分かる。キリストはこのような迫害をも耐え忍んでくださった。そのことも改めてわかる。

52節で、弟子たちが喜びと聖霊に満たされていたと書かれているのは、こんな理由からでした。

3 恵みにとどまりなさい

1) 恵みを忘れてしまう

私達も似たような所を通るかも知れません。パウロほどではないにしても、一生懸命あの人の人のために尽くした。そのことをきつと理解してくれるだろうと思ってやっていた。ところがあるとき、相手から感謝されるどころか、反対にこちらが非難されて困惑する。もちろん、言われていることが的を得ているのならば悔い改めるべきでしょう。でも、どう考えてもそこまで言われる理由はない、そう思うと無性に腹が立ったり、悲しくなったりする。とても喜びと聖霊に満たされるという思いにはならない。そういうことがあります。どうしたらよいのでしょうか。

そんなときこそ、自分のことを振り返るべきなのかも知れません。自分もかつてキリストを拒み、キリストを迫害し、十字架につけて殺した者であった。でも、いつの間にかそのことを忘れてしまい、

ちょっと非難をされただけで、腹を立てている。
もうあんな人とはつきあいたくない、とこちらか
宣言したくなる。

2) 神が与えてくださった恵みを思い起こす

でも神はどうされたのか。神を迫害した者に対してどうされたか。「もうおまえのような罪深い者とは金輪際つきあいません、あなたは救われません」と言われたか。むしろこう言ってくださった。「あなたはわたしを迫害した者だけれど、わたしはあなたを見捨てない。あなたのためにいのちを捨てる。だからわたしの恵みにとどまりなさい。」

パウロはそういうところを通ってきています。かつて熱心に神を迫害してきた自分であるのに、神はその罪を赦して下さり、和解して下さって、まったく新しいいのちを与えてくださった。これが恵みでなくてなんだろうか。

それほどすばらしい恵みを与えてくださるのだから、どうして恵あなたがたは恵みを捨てようとするのか。いや、どうかこの神の恵みにとどまってください。パウロの姿を通して、主イエス・キリストが身を低くして私たちをお願いしている、そのような姿が見えてきます。主の御名をあがめます。